

## <エッセイ>もういちど、動物園の世界へ

著者	久米 舞子
雑誌名	日文研
巻	62
ページ	42-47
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007285">http://doi.org/10.15055/00007285</a>

## もういちど、動物園の世界へ

久米 舞子

夫婦で未就学男児二人を育てている。

子供が生まれて以降、私は大学で教えたり、この国際日本文化研究センターで研究員等として勤務してきた。しかしいずれもパートタイムの仕事であり、かつ居住する市は待機児童ワーストランキング上位常連であるため、保育園への正規受け入れは到底望めないできた。保育園の一時預かりや、一般家庭に預かってもらうファミリーサポートを駆使して、何とか仕事と研究を続けている。

夫はフルタイム勤務のため、勤務日以外の平日は私が子供たちと過ごすことになる。もちろん研究ができるような環境にはない。パソコンを開けば、キーを押そうとする子供たちに狙われるし、本を読んでいれば、そんな暇があるならこの絵本を読み聞かせよとの要求が厳しい。論文は、あつという間に落書き用紙にされる。

エネルギーの塊のような子供たちに、それをいかに発散してもらうかは、常に大きな課題となってきた。とりわけ次男の育児休暇取得中や、ようやく幼稚園に入った長男が不登校ならぬ不登園であった期間（その後転園した）、また幼稚園の長期休みには、頭を悩ませてきた。

近所の公園に行ってもいいのだが、毎日となると実のところ、私の方が飽きてしまう。せつかくならば、子供たちが楽しむことはもちろん、私にとっても何か得るものがある場所はない

かと考えていた。

そうして、動物園に通うことになった。

ここ二年近く、子供たちのお気に入りテレビ番組は、動物のドキュメンタリー（NHK「ワイルドライフ」、Dite「ボンダイビーチ動物病院」）で占められている。彼らは（「機関車トーマス」を例外として）幼児番組の視聴を全てやめて、録りためた動物ドキュメンタリーを、毎日ちびちびと見ている。

また長男は、図鑑を愛読している。図鑑というのは名前を調べたり、項目を索引で引いて調べるツールだと私は思っていたのだが、長男は初めから終わりまでを熟読し、次の図鑑へ進む、という読み方をしていて驚く。動物図鑑、恐竜図鑑は二冊、三冊と揃え、しかも複数の図鑑を並べて比べるということまでしている。研究者タイプといえようか。

そんな彼らならば、動物園はもってこいだらうと考えたのだ。

私自身はといえ、幼児のころは何度か動物園に連れて行ってもらった記憶があるが、それほど頻繁ではなかったし、その後自分の意思で出かけたことは一度もなかったように思う。動物園についての知識は乏しいが、であればこそ何か新しい発見があるかもしれない。

私たち家族は大阪府に居住しているため、京阪神の大阪市天王寺動物園、神戸市立王子動物園、京都市動物園を中心に、池田市の「日本一小さい」五月山動物園や、水族館、箕面や伊丹市の昆虫館もこれに加え、ひと月に二、三度のペースで訪れるようになった。

子供たちのお気に入りには、何といってもキリンやゾウである。動物たちの、映像とは異なる存在感や迫力を感じ、食事や排泄を目の当たりにして、視線があったと一喜一憂する。本来ならば遠くアフリカのサバンナやアジアの森林に暮らす動物たちと、同じ空間に生きているのだ

と間近に体験できることは、他では得難い経験である。

旅行や帰省先でも、まず動物園がそばにあるかを調べるようになった。これまで旅行といえ  
ば、私の研究の関心上、遺跡や歴史系の博物館めぐりが定番であったのだが、これに動物園が  
加わった。四国にまで渡ったものの、行った場所は愛媛県立とべ動物園だけだったこともあ  
る。広々としていて、とてもいい動物園だった。

昨夏はフィンランドに旅行し、ヘルシンキに滞在することがあった。しかしながら、子供は  
都市には向かない。街歩きやショッピングはことごとく拒否され、強行しようとすれば地面に  
寝転がって抵抗するため困り果てた。そこで村上春樹がエッセイでヘルシンキの動物園につい  
て書いていたのを思い出し（「シベリウスとカウリスマキを訪ねて」、村上春樹『ラオスにいっ  
たい何があるというんですか?』所収）、ユルケアサリー・ズーをめぐり歩くことになった。  
ここはユルケアサリーという島全体が動物園になっている。これまで見てきた日本の動物園に  
比べると、動物の展示区画がかなり広い。そこに丈の高い草木がいれば自然に近い状態で生え  
ていて、動物がどこにいるのか、はたまた屋外に出ているのかどうかさえよくわからないこと  
があった。人間が見ることよりも、動物が隠れたり休んだりできることを重視しているように  
感じた。

溝井裕一『動物園の文化史』によれば、オーストリア・ウィーンのシェーンブルン宮殿に  
は、マリア・テレジアの夫フランツ一世が設けた動物園が今も開園しているそうだ。シェーン  
ブルン宮殿には行ったことがあるが、動物園があることは気にもとめていなかった。動物園め  
ぐりはじめて、旅行の楽しみが一つ増えたと感じている。

日本における近代動物園の嚆矢は、一八八二年開園の東京都恩賜上野動物園である。内務

省、農商務省、宮内省を経て、一九二四年に東京都に下賜された。そのあいだ、一九〇三年に京都市動物園、一九一五年に天王寺動物園、一九一八年には名古屋市東山動物園の前身となる動物園がつくられている。上野公園（東京）、岡崎公園（京都）、天王寺公園（大阪）は、いずれも明治の内国勸業博覧会の会場にあたる。動物園のはじまりと博覧会とは、関係が非常に深い。

京都市動物園といえは、日本古代・中世史では、白河天皇が発願した法勝寺の跡地にあたり、八角九重塔跡にレトロな観覧車が建つという、象徴的な風景が有名である。天王寺動物園では、毎年夏になると「戦時中の動物園展」という企画展が行われる。ここでは猛獣処分された動物の剥製や、軍装をして戦意高揚に利用されたチンパンジーの写真を見ることが出来る。

戦争と動物園を描いた物語としてよく知られるのは、上野動物園を舞台にした絵本、土家由岐雄『かわいそうなぞう』であろう。また小出隆司『ぞうれっしゃがやってきた』も、子供たちとよく読んだ。国内で唯一ゾウが戦争を生き延びた名古屋市東山動物園には、戦後ゾウを見たいという子供たちからの熱心な陳情が寄せられ、これに応じて子供たちを乗せ名古屋へ走った特別列車が「ゾウ列車」である。

日本でも動物園は一〇〇年の歴史をもっている。動物園もまた、近現代の歴史をくぐりぬけてきた。絵本や展示写真のなかの動物は、今目の前にいる動物につながっている。過去・現在の戦争について、子供たちにどう伝えていくのかは、親として気に懸けているところであるが、動物や動物園という子供たちにとって身近な存在は、それに思いをめぐらす回路として特に優れていると感じている。

またそれなりの頻度で動物園に行くようになり、動物園が抱える課題や矛盾にも気がつくよ

うになった。日本では、動物の高齢化が進んでいる。しかしゾウやゴリラ、ライオンなど人気のある動物は、ワシントン条約で売買が禁じられており、容易に手に入れることができない。そこで国内での繁殖を進めようと、動物を移動させたり、群れをつくる動物は群れで飼育しようとして集める動きがあるようだ。しかし人気の動物がいなくなれば、動物園の集客力が落ち問題となる。天王寺動物園でも、一九七〇年の大阪万博を記念してインドから贈られたアジアゾウのラニー博子さんが、二〇一八年一月に亡くなり、ゾウがいなくなってしまう。こうした課題への対応であろうか、地域の在来種を展示する動物園が増えているように思う。

都市に住む私たちの普段の生活のなかで、人間以外の生き物に接する機会はほとんどないといっている。子供がいればこそ、セミの抜け殻を集めて歩いたり、バッタを捕まえてカエルの餌にしたりするが、そうでなければ自然がすぐそばにあることすら忘れて生活をしている。人間、特に大人は不確定要素を排除して、身の回りの環境をコントロールしようと考えがちであるが、人間が見ようとしていないだけで、実は人間の生活のすぐそばにも野生動物の生活がある。夜の住宅街で、タヌキらしき動物のキラリと光る目と目があつたことがある。家の屋根裏にハクビシンに住みつかれたという友人がいる。ここ国際日本文化研究センターには、ニホンジカが窓から見えるという共同研究室があるし、動物の糞が点々と落ちていているけもの道が、敷地内を通っていることも知っている。動物園に通ううち、動物たちは今も人間と隣り合って生活しているし、人間と動物の暮らしは地続きなのだと思えることが増えたように思う。

むろんいかに動物園が教育施設としての側面を強調し、また自然保護を謳おうとも、先の『動物園の文化史』がいうように「どのような建前をとったところで、動物園は結局、動物た

ちを本来の環境からきりはなし、人びとの「まなざし」のもとへさらす装置であることにかわらない」。それでも、人間本位であるのは承知のうえで、動物園が失われる、あるいはヴァーチャルに置き換えられるようなことになれば、人間の自然に対する想像力は、さらなる後退を強いられるのではないか。動物園という世界に改めて足を踏み入れた私は、そのように思うのである。

最後に。つい先日二〇一九年一月一五日、神戸市立王子動物園のチンパンジー、ジョニーさんが亡くなった。王子動物園にやってきたのは開園四年目の一九五五年、推定六九歳で、国内最高齢であったという。王子動物園の生き証人であり、阪神・淡路大震災も経験してきたジョニーさん。彼の訃報を聞いて、このエッセイを書こうと思いついた。ジョニーさん、ありがとう。

（国際日本文化研究センター技術補佐員）